

世界を知ろう		石井 陽子 秦野市立本町中学校
担当教科：英語	実践教科：英語、道徳、学活	時間数：7 時間（1年）2時間（3年）
対象学年：中学1、3年	対象人数：70 名	

指導案

実践の目的

世界にはいろいろな国があり、私たちが生活している環境や文化とは全く違う環境や文化の中で生活している人たちがいる。住んでいる場所や話している言葉は異なっても、同じ人間であること、同じ地球で生きているということ子どもたちに伝えたい。子どもたちには世界で起きていることを身近に感じ、「世界の誰かの問題」としてではなく、「自分も世界の一員である」という感覚を持って欲しいと思っています。また、「この国の人だから」、「この国はこういう国なのだ」という思い込みを持っている人々と接するのではなく、身近な人に対しても、外国に住む人に対しても、自分との考え方などの違いを受け入れられる人になって欲しいと願っています。

本校には日本語支援教室があり、外国籍の生徒も数名在籍しています。外国からやってくる生徒、日本には幼い頃にやってきたけれど、日本語が不十分だったり、家庭では母国の文化や考え方で生活し、学校では日本の文化や考え方の中で生活するという戸惑いや不安を抱えている生徒もいます。カンボジアから来日した生徒もいます。彼らの育ってきた環境を実際に伝えることで、外国籍の生徒と日本の生徒との人間関係を築くひとつのきっかけになれるような授業をしたいと考えました。その授業をきっかけにいろいろな国にも興味関心を向けられるようにしたいです。いろいろな国を紹介したり、世界の現状を知ること、生徒自身が感じとり、世界のことについて考えられるような授業を進めたいと考えました。

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	カンボジアってどんな国？ ねらい：カンボジアの文化や生活の様子を知り、カンボジアを身近に感じてもらう。	(1)NHK の「びっくり法律旅行社」のDVD を視聴し、カンボジアの様子を知る。 (2)カンボジアに行き、やってみたいことを考える。	(1)DVD (2)ワークシート
2	カンボジアの抱える問題 ねらい：カンボジアには何年も前の戦争の地雷がまだ残っていること、それを除去することの大変さ、生活への影響を知る。	(1) DVD を見てカンボジアの内戦による地雷の影響がまだ残っていることを知る。 (2) 前回の授業では見えなかったカンボジアの問題に触れ、安全な生活がどれだけ尊いものかを知る。	(1) DVD (2) ワークシート
3	カンボジアに行ってきました！ ねらい：カンボジアに行ってみて感じたことを伝える。カンボジアの生活の様子を知る。	(1) カンボジアの人の生活の様子や、カンボジアで活動している日本人を、写真を使って紹介する。 (2) カンボジアの発展の様子や課題を伝える。	パワーポイント

4	<p>100円玉に愛をこめて</p> <p>ねらい:世界には課題を抱えた国がたくさんある。自分たちの生活の中で当たり前だと思っていることがそうではないことを知る。</p>	<p>(1) DVD を視聴し、アフリカの水事情を知る。</p> <p>(2) 水が当たり前のように安心して飲めることがとても有り難いことだということに気づかせる。</p> <p>(3) 世界には自分たちとは異なる生活環境の中で暮らしている人たちがいて、その人たちのために手助けができることがあり、自分たちでもできるということを考える。</p>	<p>(1)DVD</p> <p>(2)ワークシート</p>
5	<p>世界の子どもたち</p> <p>ねらい:世界の子どもたちの中には学校に通えず、働かなければならない子どもたちがいる。その現実を知り、児童労働について考える。</p>	<p>(1) 世界の人口や、識字率、就学率などの数字のクイズをする。</p> <p>(2) 前回の授業で「100円でどんなお手伝いをするか」の質問の答えを紹介する。</p> <p>(3) インドの児童労働の現状を伝える。実際に生徒にサッカーボールを縫ってもらい、その仕事の大変さを体験させる。</p> <p>(4) 児童労働のことを知って、どのように感じたかを考える。</p>	<p>(1) ワークシート</p> <p>(2) サッカーボール</p>
6	<p>マラウイってどんな国？</p> <p>ねらい:アフリカに対するイメージの幅を広げる。援助にもいろいろな方法があるということ、人材も援助だということに気づかせる。</p>	<p>(1)JICA 職員の坂田さんを招いての講演会</p>	<p>(1)パワーポイント</p>
7	<p>世界がもし36人の村だったら</p> <p>ねらい:世界の状況を縮小して、世界で起きていることを体験する。</p>	<p>(1) ワークショップを通して、世界の現状や問題を考える。</p> <p>(2) 世界で起きていることを身近な問題として置き換えたとき、自分にどんなことができるか考える。</p>	<p>(1) ワークシート</p>

授業の詳細

1時限目:カンボジアってどんな国？

自分たちの生活や考え方が異なることや違う文化を楽しんで受け入れられるようにとの思いから、生徒が興味をもってカンボジアについて知ることができるように、NHKのテレビ番組「びっくり法律旅行社」を視聴しました。カンボジアという国の文化やその国にある生活に根付いた法律を知ることができました。DVDの内容は、アンコールワットの中での禁止事項、スバエク、バナナの利用、民間の風習、食べ物、クローマーの使い方など、生活や文化に関することを紹介していました。

DVD を視聴する前に、クメール語クイズを行い、どこの国の言葉か考えさせました。ワークシートには

アンコールワットのシルエットを載せていたので、カンボジアだとすぐに気づく生徒もいました。番組の流れに合わせて、DVD をストップさせて一緒に問題の答えを考えさせました。



DVD の視聴後は、以下の3つのことを考えて漏らしました。

カンボジアの法律でおもしろいと思った法律はどんなことか？

この国はどんな国だと思ったか？

もし、あなたがこの国に行ったらどんなことをしたいか？

生徒の感想

- ・とても賑やかそうな国で一度行ってみたい。
- ・おもしろい法律や決まり事がいっぱいある国だと思います。そして、平和な国だと思いました。
- ・(アンコールワットの)警備が厳しく、伝統を守り、守り神を信じている。
- ・植民地時代の建物を壊さないというのは、いやな気持ちがあるのに、それを生かして、別のことに利用するというのは、原爆ドームを残すことと同じ感じなのかなと思いました。
- ・何年か前は戦争をしていたのに、こんなにすごい国になったことがすごいと思う。
- ・政治などはあまり進んでいないと思うけど、建物や食物などには手を入れていると思う。仲間の大切さなどはすごいと思う。
- ・環境が悪くて、木がなさそうなところ。自分が思っていた国と違っていました。イメージと全く違う。一部貧乏そうで、医療が進んでなさそうでした。

生徒たちの感想から、カンボジアに対するイメージがよくわかりました。戦争があったけれど、平和な国、法律がしっかりしているというプラスの面での感想を多くもつ生徒がいる一方で、マイナスな部分も感じ取った生徒がいました。今回の授業では、カンボジアの文化や伝統を知ることができたので、次はカンボジアが抱えている問題を考えさせたいと思いました。

2時間目:カンボジアの抱える問題

数年前に放送された「ウルルン滞在記」というテレビ番組で、カンボジアの地雷除去を手伝うという企画がありました。そのDVDを生徒に見せました。

アンコールワットのそばに地雷博物館があり、その館長さんが住民の人に地雷の除去の方法を教えしていました。土地を新たに買い、自分で農業をすることが夢だった人と出会い、その人の家庭でお世話になっている様子から、カンボジアの人の生活の様子が垣間見られました。料理や、学校、地雷の人々への影響。自分の畑を作るために、その場所まで行くのにも、金属探知機を使って、家族が一行になって歩きます。子どもたちはお父さんが畑に行って、帰ってくるまでが心配でたまらないそうです。近所のお父さんの友達が地雷で亡くなったばかりで、子どもたちは地雷の話になるとしゃべらなくなります。そんな様子を見て、同じ位の年齢の子の生活と自分たちの生活の違いや、安心して暮らせること



のありがたさを感じられるように、映像を止めて、話をしたり、生徒の意見を拾いました。DVDの中で、政府が地雷を除去したから大丈夫だと言われて買った土地だけれども、金属探知機は反応し、不発弾がでてきます。「国の言うことは信じられない。自分でやるしかない。家族のためだ」というお父さんの言葉からも、国の対応の状況を知ることができました。

授業を終えての振り返り

前回の授業では、カンボジアのよいところを紹介し、自分たちとは異なる文化や考え方を知り、その違いを楽しむことを目的としていましたが、今回の授業では、カンボジアの抱える問題を生徒に伝えました。一見、平和に見えても、戦争が残した跡はいつまでたっても残っています。その傷跡を治すことはとても時間がかかること、大変なことなのだとすることを生徒も感じ取っていたようでした。対戦車地雷の除去の手伝いに行っている場面の時には、本当に怖い場所に来ているんだという感じを生徒も真剣に受け止めていたようです。そのような場面の後に、木を切り倒して、畑になったときの家族のうれしそうな顔や、広い場所で思いっきり安心して走ることができる喜びを目の当たりにし、その喜びを生徒も一緒に感じることができました。

3時間目:カンボジアに行ってきました！

研修で見聞きしてきたこと、体験してきたことをパワーポイントを使って紹介しました。途中でクイズを行い、生徒の想像力や発想の豊かさのおかげで、どの写真を見ても興味をもって見てくれました。

クメール語で「こんにちは」から授業を始め、カンボジアの先生がはいているスカートをはいて、授業を進めました。カンボジアの位置や時差といった基本的な質問から、写真を見て、それがどんなものなのかを考えさせました。

授業の中で特に伝えたいと考えていたことは以下の3点です。

カンボジアで活動している日本人のこと

援助のありがた

学校の様子

生徒にとってなぜ、日本人が日本の武道を教えているのか、先生を教える先生をやっているのかという疑問はありましたが、写真を見せたり、現地で聞いてきたことを話すと納得していました。

援助のありがたは様々な形が考えられますが、本当に必要なものは何かを考えるきっかけにさせたいと考えました。ものがあっても使い方を知らなければ、意味がないことや、ものを渡して終わりではないことを知ってもらいました。また、人材がとても重要であることを伝えたいと考えていたので、自分の得意分野で活躍している方を紹介しました。

カンボジア日本友好学園や、カンボジアの教員になるための人たちのための先生方とお話している中で私自身が感じた、教育が受けられること、学校に通えることのありがたさを伝えました。

授業中の生徒の様子

次にどんな写真が出てくるのかとてもわくわくして見ていました。カンボジアで購入した雑誌にとっても興味を示していました。カンボジア国籍の生徒はとてもうれしそうに授業に参加してくれました。クメール語でなんと言うのか彼女に聞くと、恥ずかしそうに、でもうれしそうにみんなに教えてくれました。食べ物の写真を提示したときには、おいしそうという反応が多く返ってきました。

カンボジアでは英語を話せる人が多くいるという話をしたところ生徒は驚いていました。外国語を学

ぶ意義を私の体験を通して少し感じてくれたようでした。

3年生のクラスでは、援助の話をもっと詳しくしました。小学校教員養成学校にたくさんあった、電子ピアノや実験器具、ピアノ。電子ピアノは韓国からの援助品ですが、電気の通っていない学校では使えない上に、韓国語で書かれているために使えないそうです。実験器具は先生たちが実験を行った経験がないために、器具の使い方、実験の仕方がわからないので使えないそうです。ピアノも同様に、音楽の授業がないこと、もったいないからという理由で使われてませんでした。その話をしたところ、「じゃあ、俺がカンボジアで先生になるよ！」「私が教えに行くよ！」

とみんなの前で話してくれた生徒がいました。

これをきっかけに援助について考え、本当に相手が今必要としていることは何なのかを考えられるようになって欲しいと感じました。



左：電気がないために使われていない電子ピアノ。

左下：カンボジア日本友好学園

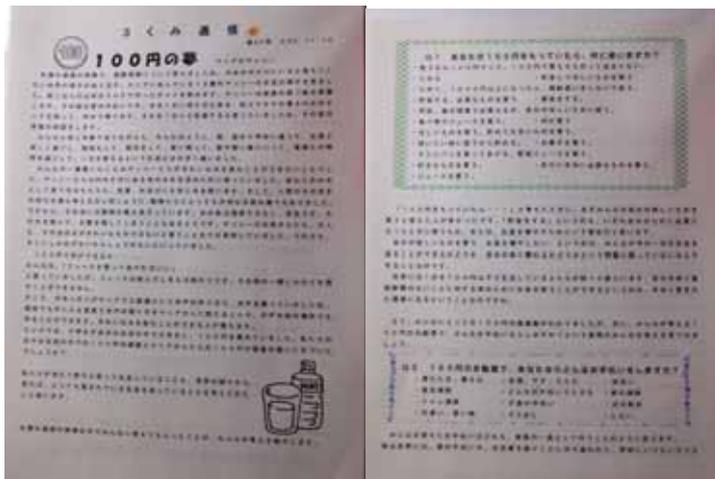
右下：青年海外協力隊の小松さん



4時間目：100円玉に愛をこめて

「100円玉に愛をこめて」というテレビ番組を視聴しました。内容は、アフリカのケニアの村に行き、生活の様子を紹介するものです。その村から何キロも離れた池に、女性は毎日2回水くみに行きます。その池は動物も一緒に使っているもので、泥水のような水しかありません。衛生的には非常に悪い環境です。村の人たちもその水がひどいことはわかっているのですが、他に水源がないために、その水を飲むしかないとおきらめています。そこで、神奈川のある小学校が日頃の生活の中でためた100円玉を集め、井戸を掘る資金にします。ケニアで上総堀りという井戸の掘り方を教えている日本人の方の協力を得て、村の近くに井戸を掘ります。村の子どもたちは初めて透明な水を目にし、大喜びです。安心して水が飲めることが当たり前の日本の生徒にとって、泥水を飲んでいると言うことはとてもショックなことのように感じました。

DVD を視聴する前にワークシートに「100円でどんなお手伝いをするか」「100円あったら何に使うか」を考えさせました。その後、DVDを見て、感じたことを記入しました。



生徒の感想をまとめた学級通信

きれいな水が飲めないということにショックを受けていた生徒が多かったです。同時に、生徒が世界に目を向けているようで、実は知らないことが多すぎるのだということに私自身も気づかされました。このくらい知っているだろうという思い込みを捨て、生徒に広い意味での世界を知ってもらわなければと思いました。

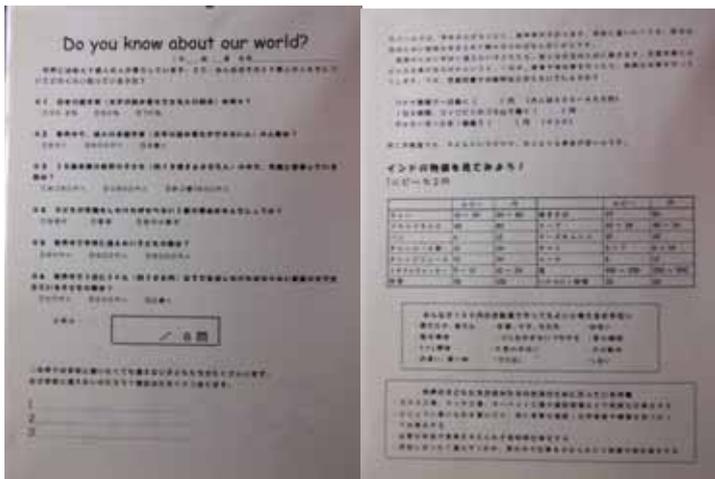
5時間目: 世界の子どもたち

前回の授業の反省をもとに、広く世界をとらえることから授業をスタートさせました。世界の人口、識字率、児童労働に従事している子どもの数、学校に行けない子どもの数を生徒に考えてもらいました。子どもが学校に通えない理由を班で考えさせ、考えた意見を発表してもらいました。

その後、実際に児童労働をするとのくらの給料をもらえるのかを考えました。大人よりも、子どもの方が給料が低いこと、インドの物価を参考にして、児童労働で得る給料の低さを感じてもらいました。また、前回の授業の中で生徒にきいた、クラスの中で挙がった「100円でやってもよいお手伝い」を提示し、比較して考えさせました。

インドでサッカーボール作りの児童労働をしている子の話を読み、実際にサッカーボールを縫うことがどれだけ大変なことなのかを体験してもらいました。

最後に、授業の感想を書きました。



生徒の感想

- ・私たちは毎日、普通に学校に通っているけど、生活のために学校に通えないと知ってとても悲しく思いました。今、私たちが普通にやっていることが他の国の人たちはできなかつたりするのは悲しいです。私たちにできることがあれば、積極的にやっていきたいです。
- ・世界には子どもでも働いていけないと生きていけない人たちがこんなにいるとは思ってもいなかった。
- ・自分たちは学校に行っているのが普通で、「かつたり〜。」と思ったりしているのに、他の国の子どもたちは学校に行きたいのに、いけない、いつもきつい労働をしていて、かわいそうだった。サッカーボールを縫ってみて、ものすごく大変だった。
- ・この広い地球の隠された真相の一部を少しだけ知ったような気がしました。もっと知りたいと思いました。
- ・子どもが働くのって大人よりも大変なのに、給料が安いのはもっとひどいと思った。働いた効果があまりないからかもしれない。でも、学校に行けないのはなんとかならないかなと思う。自分たちの立場に感謝しなければならないと思う。

生徒の感想には、「自分たちの生活が恵まれている」こと、「児童労働をしなければならない状況、学校に通えないことはかわいそう」というものが多くありました。

この授業を行った時期は学習に対する意欲が低下している時期でもあったので、学校に通えることへのありがたさに気づくにはよかったです。ただ、「自分たちは恵まれている」、「インドの子どもはかわいそう」という考えを多くの生徒が持ってしまったので、「かわいそう」という感覚を変えたいと思いました。また、広い範囲での世界を考えたので、もう少し身近なこととして世界をとらえられるような授業が必要だと感じました。

6時間目: マラウイってどんな国?

JICA 職員の坂田さんを学校に招いての講演会を行いました。始めに JICA の活動を紹介した VTR を観ました。次に坂田さんが青年海外協力隊としてマラウイに派遣されていた時のことや、マラウイでの生活、坂田さんの活動をお話していただきました。写真を使って話をしてくれたので、生徒のアフリカのイメージが変わったようでした。また、援助することの大変さ、ものをあげればよいということではないということも教えてもらいました。

サッカーが好きな生徒が多いので、マラウイでのサッカーの練習の時の様子、買い物をするときの仕方など、実際に体験された話を熱心に聞いていました。

生徒の感想

- ・私は坂田さんの話を聞いて、世界の人たちがとても苦しい生活をしているんだなと思いました。透明な水が飲めずに、泥水や池の水を飲んで病気にかかってしまったり、お腹を壊したりしてかわいそうだなと思いました。でも、マラウイの湖がとてもきれいだったので、びっくりしました。買い物をするときに値段を下げる時の「ヒー」というのがおもしろいなと思いました。ありがとうございました。
- ・今の現状や、ボランティアを改めて知ることができました。JICA の人たちは多くの人々を助けたり、援助したりして、とてもかっこよかったです。今回、坂田さんの話を聞いて、もっといろんなものを大切にしようと思いました。
- ・私はまだ、福祉施設などでのボランティアに参加したことがありません。坂田さんのように外国に行つてのボランティアはとても難しそうのでできるかわかりませんが、学校でのボランティアに参加してみたいです。
- ・坂田さんの話を聞いて、アフリカなどの開発途上国は水だけでなく、お金などにも困っていて、日本人

のボランティア活動はそのような国にとってすごく重要なのだと思いました。ボランティアなんてあまりやりたくなかったけれど、ちょっとやってみたい気持ちになりました。

・JICAの人たちやみんなが協力して、どんどん言い環境になっていって、国と国、人と人が協力すればもっと世界は良くなっていくと思いました。サッカーボールなどの援助をしても、失敗することはあるということも学びました。



坂田さんが実際に体験した話は生徒たちの中にとても強く残っていました。また、彼のようにボランティアをしてみようとする生徒や、何か今の自分にもできることがあるのではないかと考えた生徒もいました。

7時間目:世界がもし36人の村だったら

「世界がもし100人の村だったら」のワークショップを行いました。一人一人に役割カードを渡し、5時間目に行った授業を振り返りながら、世界の人口、年齢構成、地域、言語に分かれました。同じ言語を話す人を探すときには、生徒は必ず自分と同じ言語を話す人がいると信じて探していたので、とても必死になっている様子が伝わりました。言語でグループ分けをした結果、少数言語が多いことに驚いていました。栄養状態、識字率のことにも触れました。識字率では、文字が読めない役割になっている生徒に砂糖水の入った薬、ただの水、レモン水の毒の3種類のペットボトルから、薬が入ったものを選ぶように指示を出しました。選んだものを友達に飲んでもらうように指示をします。

次に富を分配する活動を行いました。ペットボトルのお茶を富裕層、中間層、貧困層の比率にしたがって分けました。1年生、3年生で異なる反応が見られました。

1年生

富裕層

たくさんのお茶をどうしたらよいのか戸惑ってしまった。他のグループが少ないのを見て、申し訳なさそうな様子。しばらくすると貧困層と、お茶がもらえなかった中間層に分けに行く。

中間層

一部の男子がお茶を分けようとしていた。「みんなで分けようよ」と言えずに黙って困った様子で見守る生徒が多数。

貧困層

わずかなお茶を渡したとたんに誰が飲むか争いに。分けると言うよりも、飲みたい気持ちが優先していた。

それぞれの様子を見て、世界の中で起こっていることと同じことが今、教室の中で起こっているんだよと説明するとはっとした表情の生徒が増えた。

3年生

富裕層

まずは自分たちのコップになみなみとお茶を注ぐ。残ったものはそのままにしておく。私の声かけで、他のグループに分けに行く。

中間層

リーダーの子(自然とリーダーになっていた)がみんなに平等に行き渡るように、コップを差し出すように声をかけ、お茶を注いでいた。最後に自分の分を入れようとしたときに、まだ、お茶をもらっていない子がいたため、自分の分をその子に全てあげる。すると、周りの4,5人の友達が「ぼくの分を飲んでいいよ」とコップを差し出していた。

貧困層

何とかみんなに行き渡るように頑張っていたが、「私の分はなくていいよ」と譲っていた子がいた。

中間層が一番多い人数だが、リーダーが自然と現れたこと、みんなに平等にしようとするのがとても良かった。

また、3年生で行った際に、地域ごとに分かれたときもおもしろい結果になった。ヨーロッパ、北アメリカ、南アメリカ、アフリカは3人ずつにわかれ、残りはすべてアジアに属するようになった。アフリカの3人は必死に「アフリカ、アフリカ」と仲間を捜すために声を出しているが、アジアの生徒たちは丸くなり、みんなが中心を見ている状態。ヨーロッパ、北アメリカ、南アメリカの生徒たちは人数の多いアジアの方へ体の向きを変えていた。ヨーロッパの生徒たちはアフリカに背を向ける格好となった。

3年生では11月にガンジーとケビン・カーター(ピューリッツァー賞を受賞したカメラマン)のビデオを見ていた。特に、スーダンの飢餓について英語の授業で学んでいたため、そのときの状況はこの状況だったのだと生徒たちが納得していた。

生徒の感想

1年生

- ・世界で起こっていることを数値だけではわかりづらいけど、実際に動いてみるとすごくわかりやすかったです。
- ・楽しかったけど、楽しいだけでなく、以外と深い事をしていたと思う。69億人の人を33人にしたら、こんなに多くの人々が貧しかったりして驚きました。
- ・富の取り合いや貧富の差がよくわかった。日本には富がいっぱいあるけれど、他の国は困っているので、分けてあげたいと思った。
- ・お茶を分けたときに、自分たちのグループはとても少なかったけど、他の人が分けてくれてうれしかった。そういう助け合いは必要だと思った。

3年生

- ・一番多かったのがアジアで、アジアの人たちは多くの人がいて安心していただけ、アジアの人たちで仲良くしていたのですが、周りの大陸をみると、人数が少なく、アジアの人たちの方をみて、「いいな」というような感じで見ていました。自分の大陸だけをみるのではなく、他の大陸も見た方がいいと思いました。
- ・みんな他人だと思っているからだめなのだと思う。たとえばお茶の時、同じクラスメイトや仲の良い友達、また、家族のような関係だとしたら助け合いたいと思うだろうから。みんな同じ人間で家族なんだ。「私は日本人だから」とかではなく、いろいろな方に目を向けられるような人になりたい。
- ・生まれたところが少し違うだけでその人の未来が変わってしまうような世界にはしたくない。困っている人がいたら助けるということはクラスの中でもできることだと思う。「他の地域」という自分勝手な偏見などがないようにしたい。国境などを気にせず人に接することができる人になりたい。

・私は字が読めず、子ども役の友達に毒をあげてしまいました。初めて字が読めないことを経験して、すごく焦りました。字が読めないと自分の直感で判断しなければならなかったのが、世界の子ども(字が読めなくて、危険なところに住んでいる)もそれで判断して危険にあっているのかと思いました。また、親は自分が字が読めないせいで、子どもにけがをさせてしまったと思いこんでしまうんだろうと悲しくなりました。

・世界のことなんか、そこに行かなきゃ体験できないと思っていました。けれど、簡単に、33人だけでできると思わなくて、ここでやっている小さな事が世界で大きなことになっているんだと思いました。それならば、みんなもっと狭く考えれば案外簡単に解決できるんじゃないかなと思いました。

・お茶を配ったときと同じように、自分がした行動によって周りの人がどのような影響を受けるのかを考えた上で行動できたらいいです。

・困っている人がいたら助ける。助けられないことでも、話をきくだけでもその人の心が軽くしてあげられるならそれはそれで良いと思う。

成果と課題

今回の研修に参加して、カンボジアで多くの人と出会い、その人たちから学ぶことがとても多かったです。私自身が感じたことを生徒に伝えたいと思っていても、なかなか生徒の発達レベルに合わず、そのレベルに1年生を持って行くために授業を行いました。

国と国が、人と人がよりよい関係を築いていくためには、住んでいるところが違って、同じ人、友達であるという感覚、この人はこうだ、この国はこうなんだ、という思い込みを教育の中で持たせるのではなく、自分たちと違うからおもしろいんだ、もっと知りたいな、友達になってみたいなという感覚をもってほしいと願っています。今回の実践授業を通して、1年生では世界の国を知り、自分たちとの違いに抵抗感をもつのではなく、興味を持たせることを最初の目的としました。そのスタートから、世界には楽しいことだけでなく、見過ごすことのできない問題はたくさんあることに目を向けるようにしました。そして、世界全体を見たときにいろんな状況があること、それも自分とは遠い世界のことでなく、同じようなことが、自分が生活をしている小さな世界の中でも起こっていることに気づかせたいと思いました。クラスの中の友達を大切にすることが広がって、世界の友達につながっていくと考えています。1年生では自分たちの状況と世界の状況が違うということを実感することができました。3年生では、世界は広いけれど、まずは自分が何かをしよう、身の回りの人を大切にしよう、世界は身近なものだという感覚をみにつけられたようです。校内でペットボトルキャップ回収ボランティアを行った際、私のクラスの生徒たちはお互いに声を掛け合って、10キロ近いキャップを回収し、全校の他のどのクラスよりも回収することができました。キャップを集めて、ワクチンに変え、世界の困っている人を助ける協力ができました。また、校内で拾ったお金(といっても1円くらいなのですが)を教室でこつこつとため、募金をしています。世界の状況を知ること、自分にもできることがあると気づき、行動に移すことができたことは本当にうれしく思います。

今後の課題としては、まずは小さな世界である学級、学校でできることを生徒と一緒に考えて取り組んでいきたいです。また、援助する方法に関しても、子どもたちの中にはすぐに効果が現れることを考えてしまいがちです。そうではなく、周りの人が笑顔になるような自分たちで実践できることから始めていきたいと思います。その中で、長期的に自然と、協力、助け合い、一緒に行くという感覚を育てていきたいと思います。すぐには変化が見られないですが、生徒の心の中に何かを残していくことはできるはずですので、たくさんの種をまいていきたいと思います。

参考資料

『びっくり法律旅行社』NHK 『世界ウルルン滞在記』TBS

『世界がもし100人の村だったら』開発教育協会